

発達と学び、そして表現

～ 小・中連携から見直す 図画工作・美術の授業 ～

大坪 圭輔（武蔵野美術大学教授）
小池 研二（横浜国立大学准教授）
石賀 直之（鶴見大学短期大学部専任講師）



小中連携を考える前に、私たちは教育についての視点を整理しておく必要があるようです。それは、学校連携自体が教育全体を見通した上に成立するからです。

能力と「脳力」

近年は脳に関する研究が進む中で、人間の能力全体からすればまだ糸口程度ですが、脳のさまざまな領域や関連のみならず、創造性の在り処さえも次第に解明されるようになって来ました。その一方、脳研究が注目されるに従って、人間の複雑で豊かなさまざまな能力が「脳力」というキャッチコピーに代表されるように、知識の量を中心とする部分的で偏狭な「頭のよさ」として誤解される傾向にあります。さらに、その「脳力向上」を銘打った商品が流行し、教育の目的さえもその「頭のよさ」にあるかのごとき風潮があります。しかしながら、子どもたちの行動はいつも総体的であり、ある行動に際して中心的に働いている脳の部位はあったとしても、限定された能力のみが働いている場面はほとんどありません。

教科の学習と能力

各教科の学習においても、子どもたちは国語では言葉の脳力を、算数では理数的な理解力だけを用いているのではなく、それぞれの年齢で働かすことのできる能力のすべてを用いて体験し学んでいます。すなわち、偏狭な「脳力」論ではなく、感情や意思を伴う認知や身体能力などの成長全体が、学習の本体であると言えます。

各教科の学習には、学習指導要領が示す学習の目標があ

り、その目標の達成に必要な学習内容が設定されています。そのような教科の枠組みだけを見るならば、教科はそれぞれに独立した特質を持つ学習であると言えます。しかしながら、学習者である児童生徒の立場から見ると、各教科の学習に対応したそれぞれの能力があるのではなく、教科の学習は自身の能力の生かし方や使い方の変化でしかないのです。

連携の必然性

今こそ、子どもたちの学びや成長を細切れにするのではなく、人の成長を総体としてみる視点が必要です。人間としての全体像を考える中で、学校教育が何を担当すべきなのか、そのために各学校や教科は、どのような学習内容や課題を設定するのか、あらためて考察しなければなりません。すなわち、学校連携は学習内容の効率のよい配列や分配、教育行政としての組織運営の効率化などによって発想されるべきものではなく、教育全体を見通すという立場からの必然的な視点であると言えます。国民として、社会人として、国際人として、そしてなにより人として育つための教育を考えると、既存の学校や教科という枠組みを越えた発想が望まれます。

実践力という専門性

一方、このような理念を考える時間もなく、教師は日々の授業を消化することに追われているという実態もあります。しかしながら今必要なのは、眼前の子どもたちを通して、教育の流れや全体を見通すことです。実態や実感のない理想論ではなく、日々の教育活動を展開する現場の教師



の実践力としての専門性からの発想が必要なのです。次に、このような視点で、図画工作科や美術科の授業について検討してみます。

発達と図画工作

現代の教育が、人間の成長に一定の法則性があるとする理念に基づいているとの見解に、大きな異論はないと思います。そして、その多くに医学や心理学などを含めた認知科学の研究成果が貢献しています。身体性が重要な要素のひとつである造形美術教育においては、発達の様相を踏まえた指導のあり方は特に重要であり、造形表現における発達の研究は、認知発達と共に絶えず検証していく必要があります。

図画工作科も当然のことながら一部の造形能力の伸長を担当するものではなく、子どもたちの全人的な成長全体に対して責任を持つものです。したがって、認知発達や造形表現における発達の様相を踏まえるとともに、他教科や領域との関連性が重要です。

美術文化の教育

成長全体に対して責任を持つという点では、基本的に中学校美術科も同じです。しかしながら、その学習の視点は自分から他者へ、そして社会へと広がります。広がる過程において、さまざまな能力の深まりとともに、そのために必要とする知識もまた増加します。中学校の美術科における鑑賞重視の傾向は、自分自身と美術文化と社会との関係を考えさせるという教科性が、一層強まったと理解することができます。人としての諸能力の発達に立脚した図画工作での体験的学びをベースに、自己の深化とともに他者との

関係性や社会性に立脚した美術文化の学習へと質的变化をしていくことになります。

文化の主体者として

中学校美術科が美術文化の学習という性格を強くするとき、注意しなければならないのは、「文化消費者」を育てることではないという点です。「美術を愛好する心情」とは、「琳派」や「印象派」の学習を通してその知識を与え、美術館に足繁く通う美術ファンを養成することではありません。造形芸術から生き方を発見し、生活の中に造形的能力生かす自発的、主体的な姿勢の育成こそが大切です。デザイナーや作家とは、その時代の人々の気持ちや空気を読み取る力を持った人です。すなわち、一般大衆がデザイナーや作家をして、その時代の文化を創造させているということもできます。

このような文化の主体者としての意識を持って育つための基礎は、小学校の図画工作にあります。まず、表現活動を通して自ら作り出す喜びを味わうことです。自らが活動する意欲やエネルギー、それらを生み出す興味関心や楽しさが文化創造の根源にあるのです。

連携のために

本資料には、教科書における小学校図画工作と中学校美術の関連性が分析されています。それぞれの学習課題の目的がどこにあるのかを検討する中で、その課題による学習成果はどのように発展するのか、もしくは、この学習課題に対応する能力をどのようにして児童生徒は獲得してきたのかに注目してください。連携を意識するとき、何気ない表現の中に大きな成長を見出すことができます。

造形遊びから—自然を体全体で感じることの大切さ—



自然に対する小学校低学年のまなざし

タンポポをじっとみつめながら両手でそろえている女の子(小/1・2上)を見てください。タンポポの花をそろえながらどんなことを考えているのでしょうか。何かをつくりたいのでしょうか。それともタンポポの花の美しさを感じているのでしょうか。いずれにしてもタンポポそのものもつ自然のすばらしさ、もっと大げさに言えば神秘を感じているのでしょうか。このような感覚はむしろ幼い子どもの方が強く感じているのではないのでしょうか。

自然を目で見ることだけではありません。この子どもたちが座っている芝生のチクチクした感じとか指先から香る草花の匂い、ほおを伝わる風の感じなど体全体を通して自然をあげわっていると考えられます。このような身体が自然と一体化するような感覚は誰もが経験したことでもあります。

小学校低学年の自然を使った造形遊び

体全体の感覚を使って材料と友だちになるように関わることが小学校低学年の造形遊びで求められています。この写真の姿は自然材に対しどの子も指先を使って表しているようですが、先に述べたように、この場にいることすべてを含め全身で自然にひたりにながら活動しているのです。なにかをつくるためというより自然の中で感じたことを表していること自体が小学校低学年の自然を使った造形遊びの価値と言えます。

自然に対する小学校高学年のまなざし

深まる秋、小学校5年生の子どもたちが夢中になって落葉を集めています。ほうきで掃く音や落葉がこすれ合う音が聞こえてきそうです。自然そのものと一体化するような感覚を通して、小学校高学年の子どもたちも、低学年の子どもたちと同じようにそのよさを味わっています。

体全体で自然を味わっていること自体は低学年と同じなのですが、この写真を見ると、子どもたちがそれにとどまらない何かを感じているように思えます。この子どもたちは落葉を意図的な形に積み上げています。これは低学年の子どもたちが自然を「触る」感覚を楽しみ、味わうことを重視しているのに対し、小学校高学年の子どもたちは「視る」ことも深

く感じているのです。落葉と落葉の重なり、そこに差し込む秋の光、柔らかな影など、高学年の子どもたちはこの自然環境全体を「視て」いるのです。

小学校高学年の自然を使った造形遊び

小学校高学年の造形遊びは、学習指導要領において「材料や場所などに進んでかかわり合い、それらを基に構成したり周囲の様子を考え合わせたりしながらつくること」(内容A表現(1)イ)と示されています。

ここで大切なことは場所を大きく材料ととらえ感覚を働かせて活動する子どもの感じ方そのものです。いわゆる現代アートの空間に対するインスタレーションをおこなえばいいということではありません。低学年の時のタンポポを見つめていたまなざしが、そのままその場所全体に広がっていったのだということを忘れないようにしたいものです。そして、その子どものまなざしは中学校に行っても変わりません。

自然に対する中学校2年生のまなざし

アンディ・ゴールズワージーやニルス・ウドの作品があります。その横には中学生が砂浜で大きな渦巻きをつくっています。この中学生たちはゴールズワージーやウドの作品をコピーするように真似て、このような作品をつくったのでしょうか。中学生たちはゴールズワージーやウドに影響されたに違いありません。しかし作品として影響されたことにとどまらず、ゴールズワージーやウドの自然に対するまなざしに影響を受けたのです。それは、幼い頃の自らの自然体験と重なり合い、自身の価値観と重なり合いながら、よさや美しさを味わっているのです。芸術家に触発された自らの体験に基づくまなざしこそ中学生の姿です。

中学生の自然を生かす活動

中学生の活動であっても、自然に対し五感を働かせながら感じたことを表すことは、小学校の子どもたちと全く同じです。ただ、その表現にはよさや美しさ、調和といった社会的ともいえる概念が、生徒一人ひとりの心に表れることも事実です。そこで芸術家のまなざしに触発されるようなことも起こり得るのです。

技法の発見 - 発見の楽しさ、表現の喜び -



『うつつして見つけて』～発見する楽しさを味わって～

ローラーやスタンプなどをつかった遊びは、幼児から小学校低学年にかけての子どもたちにとって、大好きな活動のひとつです。子どもたちは飽きることなくローラーやスタンプ遊びを続けていきます。子どもたちにとってこのような遊びの楽しさとはなんでしょう。それは「発見の楽しさ」にあるのではないのでしょうか。絵をかく行為とちがって、ローラーやスタンプは偶然生まれる形や色のおもしろさがあります。このような意外性が何度も試したくなる楽しさなのです。

上の写真を見ると、ローラーは転がすだけでなく、端を使ったりステンシルのように写し取ったりするなど、さまざまに使われています。子どもたち自身が、用具を使って形や色を発見する楽しさを味わっています。

このような活動の他に、幼児や小学校低学年の子どもたちが好きな活動としては、こすりだしやモノプリント（簡単な版遊び）があります。どの活動も用具をつかって、形や色の意外な発見を楽しむ活動です。

『わたしは絵の具のマジシャン』～用具や絵の具で遊ぶ～

絵の具を使って絵をかいてきた子どもたちが、小学校中学年のときに出会う題材です。この題材は絵の具を、絵を描く画材として扱うのではなく、絵の具を材料として扱う題材です。つまり絵の具を使って、子どもが発見という楽しさを思う存分に味わう活動なのです。

使う材料は絵の具だけではありません。ストロー、ビー玉、発泡スチロールの破片、綿棒、スポンジ、歯ブラシ等々身近な日用品ばかりです。これらを使って子どもたちは絵の具でどんなことができるか楽しみながら発見していくのです。

子どもたちはこれらの用具を使いながら様々な方法を試します。絵の具をストローで吹いてみる、ビー玉に絵の具をつけてころがしてみる、歯ブラシに絵の具をつけてみるなど実に様々なことにチャレンジしていきます。まさに絵の具と用具で、造形活動を遊びつくすという表現がびったりです。友だちと見せ合ったり技を教え合ったりしながら、そしてどん

なことができるのか話し合いながら活動していきます。教師が思いもよらなかった方法を編み出す小学校中学年の子どもたちのパワーには、驚かされることもしばしばです。

『広がる形や色』～技法の発見から表現へ～

画材を手に、なにかを描くことばかりが表し方のすべてではありません。ドリッピング、スパッタリング、デカルコマー、ブラッシング、フロッタージュ、ステンシルなどはすべて表現上の技法の名前です。これらの技法を駆使して生まれた芸術作品は数多くあります。右上の写真にもありますがサム・フランシスなどはその代表的な作家と言えるでしょう。中学校の生徒たちは、先人のこのような表現技法を通して、芸術の幅広さや奥深さに魅力を感じるのです。

ここで感じてほしいのは、このような芸術作品のよさだけではありません。この表現方法から、作者がなにを感じながら表そうとしたのかを、考えることも大切です。それは作者の表現方法のうわべをなぞったり真似たりするのではなく、作者の感じ方に迫るということです。そして生徒自身がさまざまな表現方法を実際に体験することで、作者の物まねではない共感が得られるのです。

『幼児も小学生も中学生も芸術家も同じ』という発見

中学校の生徒たちは、さまざまな表現方法を試しながら芸術家の感じ方に迫るとともに、自分自身の今までの経験にも迫ることになります。これは幼い頃絵の具で遊んだ経験や、小学校で楽しんだ絵の具と用具を使った遊びなどの経験です。

幼稚園や小学校の頃は、思いつくままに用具を扱っていたにすぎません。しかし、芸術家の表現に触れ表現することから、ものごとの感じ方の深みを味わっていくことになります。そして、幼児期や小学校時代に夢中になって絵の具や用具で遊んでいた自分自身の姿を重ね合わせるにより、表現することの重層的な味わいや共通性を実感するのです。

表現するとはどういうことなのでしょう。それは幼児も小学校も中学生も芸術家もその本質は同じなのです。このような活動を繰り返しおこなうことの意義は表現する喜びを確認し続けていくことなのです。

写すこと、表すこと - 版表現の連携と可能性 -



版表現の楽しさ 小学校を中心に

上の左側の写真は小学校低学年の『うつしてあそぼう』という題材です。吸水性のないものの上に絵の具をのぼし、模様を描いて紙に写すモノプリントの方法を使った表現活動です。絵の具を直接手でのぼしたり、ひっかいたりして絵の具の触覚を楽しみながら模様を描いていきます。その絵の具の上に画用紙をそっと載せ、形を写し取ります。子どもたちはどきどきわくわくの気持ちをうちに秘め、静かに画用紙をめくりあげて、写しとった作品と対峙します。その瞬間「わあーっ」という、子どもたちから何ともいえない驚きと満足感の入り交じった声が聞こえます。

「ものの形を写し取る」、これはまさに版表現です。この題材は自分の手というもっとも基本の道具を使って版表現を行っているといつてよいでしょう。

版表現はたいへん自由度の高い題材です。ペットボトルのふたや洗濯ばさみなどの身近な材料を使うスタンプ遊びや、葉っぱや木目の模様をクレヨンでこすり出すフロッターージュも、「ものの形を写し取る」版表現と言えます。このように広範囲にわたる活動ができる版表現を小学校（もしくは就学以前）の早い段階から子どもたちに体験させることは、造形活動の基礎的な能力を培う上でとても大切なことです。

版表現の楽しさ 中学校を中心に

上の右側の写真は中学校1年生の題材です。そして教科書にある題材名はまさに『写し取る形』。この題材名だけを見ても、先ほど示した小学校の題材と同一の方向性を持っていることがわかります。

中学校ではコラグラフという技法を取り上げています。段ボールや紙や紐などの身近な材料を紙に貼り、版を作ります。そしてローラーでインクを付け、プレス機で写し取ります。材料や道具など多少手が込んできた部分はありますが、「ものの形を写し取る」という基本は何ら変わっていません。そしてここでも、子どもたちのどきどきわくわくの気持ちはかわりません。刷り上がった作品を見たときの「わあーっ」という声と満足げな顔も同じです。



表現のスパイラル - 繰り返すことの重要性

小・中学校の一貫性ということで、「ものを写し取る」という非常に似た意味合いを持った活動例を示しました。それでは、小・中学校どちらか一方でこの活動をすればよいのでしょうか。小・中学校で繰り返しこのような表現を行うのは無駄なのでしょうか。決してそんなことはありません。中学生は突然造形的な表現ができるわけではありません。小学生のうちから、様々なアプローチで表現方法に触れることで感性が豊かになります。版表現ひとつとっても、言わばスパイラル的に触れていくことで、ものの見方や表し方はより深まっていくのです。

長いスパンで考える - 連携の大切さ

版表現を扱うときに大切なのは、子どもの発達に合わせた題材を設定することです。小学校低・中・高学年、中学生それぞれにふさわしい表現方法を工夫していくことが指導上の重要なポイントです。子どもたちが楽しく感じ、興味や関心をもって取り組めるような内容を押さえ、題材を設定することが大切です。今までは学校内で題材設定が行われているのが普通でした。しかし、この題材例を見てもわかるように、題材や表現技法などについて小学校・中学校間で話し合いが行われ、一貫した流れをつくりだすことは大変意味があることなのです。初歩的なものから工程が複雑な高度なものまで、版表現は多岐にのびますから、特に長いスパンで考えていくことに意味があります。

堅苦しく考えずに楽しむこと

我が国の版表現は長い歴史を持ち、江戸時代の浮世絵版画などの美術的価値は国際的に高く評価されています。小・中学校でさまざまな版表現に親しみ学ぶことは、このような我が国の文化を学んでいくことにもつながります。そのためにも、版の楽しさ、自由さ、表現の豊かさについて楽しく経験していくことが大切です。

版による表現について堅苦しく考えず、色彩の美しさ、形のおもしろさ、効果の楽しさといったさまざまな要素について、子どもたちの目線に添った楽しい授業を小中で連携しながら考えていくことが、今後一層重要になってくるでしょう。

素材の魅力・粘土—小学生も中学生も手で考える—



粘土をさわると気持ちが落ち着くことの不思議

入園したての3歳児が、母親と離れ不安な思いにかられ泣いています。どうしたら泣き止むのでしょうか。保育士はそっと粘土を渡します。泣きながら粘土を触っていた幼児はいつの間にか泣き止みました。これは特別なことではありません。粘土にはこのような気持ちを落ち着かせる不思議な力があります。人間の本能とも言えるのでしょうか、手を動かして粘土と格闘しているといつの間にかすっきりした気持ちになるのは大人も子どもも同じです。粘土の魅力はこのようなところにもあります。

可塑性がもたらす造形的な発想力

人間は、触ることでそのものがどういうものかを了解するものです。乳児がなんでも口に入れるのは、食べようとしているのではなく、そのものがなんであるか確かめようとしている行為です。粘土の教材としての大切さや魅力は、主としてこのような触覚による感性にあります。触ることで確かめようとするのと共に、ものの形を変えていくことも自然な行為です。砂遊びやどろんこ遊びに興じる子どもの姿を思い浮かべれば納得できます。そして変えた形を留めておきたいという欲求が生まれるのもごく自然なことです。このようにして、人は絵を描いたりものをつくったりしてきたのです。粘土は自在に変化し、思うままの形に留めておくことができる素材として根源的な造形欲求を満たしてくれる貴重な素材です。粘土を触ることで、あたたか指先から発想が広がるように表現が深まっていくのです。

粘土を通した自己発見～繰り返し使うことの意義～

粘土を使って作品をつくるそのたびごとに新しい発見があります。これは粘土の中に発見する何かがあるのではありません。子どもたち自身が自分の可能性や新しいものを見方を、粘土を通して発見しているのです。粘土は幼児のものでも、小学生のものでも、中学生のものでもありません。低学年のときにやった題材だからとか、小学校で扱う材料だから中学校では扱わないというものではありません。繰り返すことで子どもは自己を発見していくのです。粘土は幼児から大人まで、何度でもいつでも触れながら活動することが大切です。

小学校低学年の粘土の活動～豊かな想像力に添えて～

真剣なまなざしで、一緒に遊んでくれる夢の「どうぶつ」をつくっています。空を飛んだりみんなにプレゼントを届けてくれたりするなど、この頃の子どものらしい豊かな想像にあふれています。この頃の子どもたちは最初からつくりたいものがはっきりと決まっているのではなく、つくりながらどんどん想像を広げていきます。大きな背中をもった「どうぶつ」をつくっていたら、その背中の上で遊んでいる自分をつくりたくなり、背中の上が遊園地のようになっていくなどはよくあることです。このような子どもたちの豊かな発想に粘土は自在に添えてくれます。思いがひろがり、さらにそこから発想を広げていくことのできる粘土は、小学校低学年のうちには十分扱いたいものです。

小学校中学年の粘土の活動～思いついたことが形に～

ダイナミックなオーバーヘッドシュートをしているアシカです。これは小学校中学年の作品です。サッカーが大好きな児童がつくったのでしょう。生き生きとした体の使い方が印象的な作品です。この作品は最初からこのような形をつくっていたわけではありません。まずアシカをつくり、手足を自在に動かしながらいろいろなポーズを楽しむことから発想を広げ、オーバーヘッドシュートのポーズになったのです。小学校中学年の子どもたちがよく言う言葉のひとつに、「いいこと思いついた！」があります。粘土の可塑性はこのような小学校中学年のアイデアに添えてくれる材料なのです。

中学生の粘土の活動～素材のよさを生かして～

中学生の生徒作品です。バッファロー、犬といった作品をつくっています。小学生のような多彩な想像は影を潜めていますが、モチーフとなっている動物の質感をよく生かしている作品です。中学校の生徒たちは、粘土を巧みに扱いながら自分の表現を深めていきます。指先と粘土が一体になったような感覚を楽しみながら、表したい感じを表現しているのです。このような活動は、これまで粘土を繰り返し扱ってきたことが基礎になっているのです。粘土に長く親しんできたからこそ指先と粘土の一体感が生まれ、このような作品が生まれてくるのです。

工作からデザイン・工芸へ自分から他者へそして社会へ



自己表現としての工作

小学校図画工作科、A表現(2)「絵や立体、工作に表す活動」のうち、ここでは意図や用途がある程度明確で、生活を楽しくしたり伝えあったりするものなど、工作に表す内容について考えてみます。

中学校美術科のA表現は(1)絵や彫刻、(2)はデザイン・工芸の内容に分類されますが、小学校図画工作科の工作の内容は後者の(2)デザイン・工芸へ、さらに技術・家庭科の技術分野へ接続することになります。小学校の段階では、表現のひとつの内容としてまとめられている「絵や立体、工作に表す活動」が、中学校では二つの内容へと発展するわけであり、この点こそが子どもの表現の特性により小・中の連携を考えるポイントでもあります。

おしゃれなバッグ 小1・2上 A表現(2)

小学校図画工作科A表現(2)は、児童が感じたこと、想像したことなどのイメージから、表したいことを見つけて、好きな色を選んだり、表し方を考えたりしながら思いのままに表す楽しさを味わわせることが大切です。

小学校低学年『おしゃれなバッグ』は、「物を入れる」という用途や機能をもったバッグをつくる活動です。ここでの児童は、バッグの機能を工夫すると同時に、表面に絵をかいいたり飾りをつけたりするなど、絵や立体と工作の内容を関連させて表現することを楽しむこととなります。

わたしはデザイナー 12さいの力で 小5・6下 A表現(2)

小学校低学年の段階からA表現(2)を通して、思いのままに表す楽しさを味わった経験を重ね、児童の表現は次第に自己を見つめ、他者や社会を意識した内容へと発展していくこととなります。

小学校高学年『私はデザイナー12さいの力で』は、この様な児童の発達の特徴をとらえ、板や角材を使って楽しい入れ物をつくる活動です。家族が使うティッシュケースをつくらしたり、得意なサッカーのデザインを本棚に取り入れられたりするなど、他の人との関係の中で次第に自分の役割を意識したり、自分らしさを表現したりしようとする姿を見ることがで

きます。

自己表現と適応表現への進化

このように、小学校での学習や経験の積み重ねが、自己深化や他者および社会への意識を育み、さらに中学校での学習へと繋がることとなります。

より深く自己を見つめる活動は、中学校美術科における「絵や彫刻などに表現する活動」として、対象を見つめ感じ取ったことや考えたこと、心の世界などから主題を生み出し、それらを基に表現の構想を練り、意図に応じて材料や用具、表現方法などを自由に工夫して表現する活動へと繋がることとなります。また、他者や社会をより意識した内容は、中学校美術科における「デザインや工芸などに表現する活動」として、伝えることや使うことなどの目的や条件、及び機能と美の調和などを考えて発想し表現を練り、意図に応じて材料や用具、表現方法を工夫する活動へと繋がります。特に図画工作科のA表現(2)の工作の内容は、美術のデザイン・工芸との接続を意識することが大切です。

装いの表現 中2・3下 A表現(2)(3)

『装いの表現』は、制服や私服など、毎日の生活の中で時と場合によって使い分けしている服装や身に付けているものなどの「装い」について考え表現する活動です。

生徒は、アフリカの民族衣装やオリンピックの開会セレモニーの衣装などを鑑賞し、仲間として、あるいは個人としての意識を「装い」によって表現していることを理解します。さらに、構成や装飾、用途や機能などデザインの要素に着目し、自分自身はもちろん、まわりの人たちも楽しくなるような装いのデザインを構想します。

アクセサリーなどの小物のデザインや、場やテーマを想定したファッションデザインなど、どれも他者や社会との関係の中で、自分らしさを意識しながら表現する喜びや、表現の中に遊び心を盛り込む楽しさが味わえる活動です。小学校の工作から中学校のデザイン・工芸への繋がりの中で、義務教育の最終段階を意識した題材となっています。

かんしょうから鑑賞へ - 身近なものから社会の中へ



小・中学校一貫の鑑賞活動を

鑑賞は言うまでもなく、表現とともに小学校図画工作科及び中学校美術科の内容を構成する2領域のうちのひとつです。小・中学校9年間を通して学習する内容において、一貫した教育が最も期待されるもののひとつです。図画工作科と美術科での鑑賞の考え方は一見すると多少の差異があるように見えますが、これは児童生徒の発達段階を踏まえた上でのことであり、根本の趣旨は共通しているといえます。

小学校における鑑賞活動

小学校学習指導要領図画工作科の1, 2学年の目標(3)には「身の回りの作品など、面白さや楽しさを感じ取るようにする」とあります。身近なところから自然に鑑賞活動はスタートするのです。しかも、表現と鑑賞は相互に関連して働き合うものとして捉え、鑑賞の活動や作品などの対象を幅広く考える必要を説いています。つまり、低学年では自分や友人の作品だけでなく、表現活動に使用する材料なども、見て楽しむ対象と捉えているのです。それが発達とともに、身近にある美術作品、さらには我が国や諸外国の親しみのある美術などというように鑑賞の対象は広がっていきます。また、活動の内容においても、楽しく見る、面白さに気付くということから、表し方の違いや材料の違いが分かるようになる、さらに社会や文化を対象として捉え、分析的に見るところまで深まっていきます。このような鑑賞活動において、話す、聞く、話し合うなど、言語活動の発達に対応した学習は大切です。

中学校における鑑賞活動

中学校での鑑賞の学習は、自然や身の回りの造形、美術作品などのよさや、美しさ、創造力のたくましさなどを感じ取り、心をより豊かなものにし、さらに作品との対話を重ね理解することによって、多くのものを感じし学び取るための資質や能力を育成することをねらいとしています。これを見ても分かるように、小学校で行われる鑑賞の活動を土台としているのです。さらに日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞の対象にしますが、この点についても小学校との関連性が見えてきます。

そして鑑賞は、知識を詰め込むものではなく、思いをめぐらせながら対象との関係で自分の中に新しい価値をつくりだす創造活動と捉えています。活動していく中で知識を獲得することは当然ありますが、ただ単に作品名や技法を覚えるのは、鑑賞活動ではないのです。学習指導要領解説においても、鑑賞について、自分の感覚や行為などに基ついた能動的な活動であることに配慮する必要性を説いています。中学校でも言語活動の充実は小学校と同様に重視されています。1年生での「作品などに対する思いや考えを説明し合う」活動が、2, 3年生では「作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合う」活動になっています。

実際の活動事例をもとに

左の写真は『みんなおいでよ、わたしのクラスへ-人形劇遊び-』という小学校低学年の題材です。今までつくってきたものを使って、ゲームや人形劇などの活動を楽しむというものです。同時にその活動を友だちに見てもらおうというものです。ここでは友だちと協力し合って、つくったり遊んだりする表現活動をねらいに据えています。同時に活動を見たり見せたりすることも大切なねらいのひとつとなっています。

右の写真は中学生による美術館での鑑賞活動を学習内容とした『感動・発見美術館』という題材です。ここでは美術館を積極的に利用し、楽しむことを目標に据えています。また美術作品と直に接することにより、鑑賞活動をより深いものにし、主体的に鑑賞しようとする姿勢を育てようとしています。堅苦しく考えずに楽しく作品と接しながら鑑賞することが大切なのです。この点においても中学校の鑑賞は、小学校から脈々とつながっているとと言えます。作品と素直に対話し、作品について友だちと話し合ったり、批評し合ったりして鑑賞を確かなものへと発展させていく力は、小学校から繰り返し行われる鑑賞活動が重要な意味を持っています。

鑑賞する力は生涯の財産になる

今まで見てきたように鑑賞活動は小学校から繰り返し行うことによりその力が培われていくものです。しかも鑑賞する力を養うことは義務教育の段階で終わるものではなく、生涯にわたり、文化的な人生を送る上で大切な力ともなるのです。